

---

# 専業主婦ですけど、ナニカ？

紫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

専業主婦ですけど、ナニカ？

### 【Nコード】

N6773T

### 【作者名】

紫

### 【あらすじ】

名前 樋野 史 29歳

職業 専業主婦

家族 夫、子供二人、くそババア姑

### 最近の出来事

突然、どこかに飛ばされました

## 前置き

RPGも、小説も、トリップ物って学生とか若くなくても20代前半とかが主流よね？

まして、三十間近、子持ちの主婦なんてお呼びでなかったじゃない！明日だって、長男の遠足だからお弁当だって作らなきゃいけないのに！

幼稚園の年少組だから一緒に行ってあげなきゃ、旦那なんてあてにならないし。

姑のババアの世話だって、夕飯の片づけだって、明日の準備だってまだしてないのに

なんだって

なんだって

なんだって、私

こんな、湖のど真ん中の小島にいるの？



## ここに来る前にあったこと その1

今日は朝から最悪だった。

同居の姑が朝ごはんのお味噌汁にケチ付けてきて、あの忙しい時間に説教が始まった。

「史さん、おみそ汁の具わたし絹サヤ入れるのやめてって言ったわよね。なんで入ってるのよ」

「色取りが良いからですよお義母さん。幸太郎さんも気に入ってくれてるし」

「こうちゃんがこんなもの好きなもんですか、どうせあなたの実家の送ってきた泥臭い野菜使ったんでしょ？だから嫌だったのよあなたみたいな田舎の人間なんて」

「・・・・・・・・」

「大体、うちのこうちゃんは無農薬の有機栽培のお野菜しか食べないのに・・・・・・・・」

まだまだ続くお小言に耳をふさぎ黙々と朝食を口へ運ぶ。

こうちゃんって、まだ子ども扱いしてんのか？

もうあんたの息子は立派な33歳だぞ。

気持ち悪い、気持ち悪い気持ち悪い・・・・・・・・。。

夫は決してマザコンではない。

こんな時も私の味方をしてくれるし、お義母さんが何を言おうと自分の意見を通すし。

離れられてないのはお義母さんだけ。

でも、三日前からの出張で頼りの旦那さんはいない。

お小言が長男を送り出した後でよかった。

こんな文句とてもじゃないけど聞かせたくない。

あ、あした遠足だったつけ。

お弁当の材料買ってこなくちゃ。

あと、トイレットペーパーもあと2つだったから買わなくちゃだし。  
旦那さんが帰ってくるのは一週間後だからビールはなくてもいいし。  
・・・

あ、お風呂の洗剤なくなりそうだった！

やばいやばい買い忘れるとこだった。

「ちよつと、史さん聞いているの！！！！！！」

お義母さんの、怒った声でわれに返る。

「すみませんでした、泥臭い野菜で。でも実家の野菜は無農薬だし土から育てた一級品です、現にプロの料理人の方々に高く評価していただいていますし、野菜の食べられなかった幸太郎さんも気に入ってくれます。ですがそんな泥臭いお野菜がお義母様にはお口に合わないようなので今後一切お義母様のお口どころかお目に触れることの無いように気を付けますので。」

勢いをつけて立ち上がり食器を二人分重ね流し台に突っ込む、お義母さんの分のサラダが残っていたがそんなものは構わない。

私のことだけならいい、実家のことまで馬鹿にされるのが耐えられなかった。

力任せにゴシゴシお皿を磨く。

泡がそこらじゅうに飛び散ってるけど構わない、どうせ掃除するのは私なんだ。

一通り家事を済ませると買い物に出かける。

いつも通りの一連の作業。

いつもと違ったのは道路の真ん中に真っ白と真っ黒の子猫がいたこと。

車あまり通らない道だったから立ち止まって抱き上げた。

すると角から勢いよくトラックが曲がってきて……………

気が付くと私は知らないところに一人倒れていた……………。

## ピンチ&ピンチ

浮島のような狭い場所に横たわっていた私はチャプチャプと触る水から足を引き上げた。

こういうところではきっと怪物か、勇者か、悪魔とかいるんのがいるのかなぁと思ってみる。

それこそ、子供が生まれるまで私の趣味は読書だった。

空想することが得意だった子供のころ、こーゆー世界にあこがれたっけなあと。

でも、今となってはのんきに空想していたころの私に言いたい。

実際なつてみるとポカンだぞ。

そういえば、旦那が出張に行く前浮気の証拠を見つけてしまったなあ。

携帯の着信画像、浮気相手だった。

きつと彼女（浮気相手）がやったのだろう。

旦那は機械音痴で会社で必要だから持っている程度の必要性しか感じていないはずだ。

だから、子供の待ち受け写真に設定したのは私。

自分で設定なんてできないだろうし。

きつと、今回の出張も彼女と行っているのだろう。

だいぶ前から、もうすぐ4歳の長男が生まれたころから私たちの夫婦生活は破たんしてる。

お互いを女、男として見ない。

完全に夫婦愛ではなく家族愛に変化してしまった。

ここ最近、空気みたいなの………。

愛人がいても当たり前な状況ではあった。

決定的なのは旦那のカバンに入っていた離婚届。

夫婦ではなくても家族ではいたかったのに……。

こんな場所で考えていても、まあ無理なのは決定的で。  
はたして帰れるのか、そして人はいるのかそれが先決である。

「……………」

少し先に岸は見える。

ここからの問題は、私が金槌だつてことぐらいかな。

どうしょ。

生きて帰れるのかなあ

私、初っぱなからピンチ。

であつた????

渡ろうとすれば何て事はない、深いところで胸の辺りまでしか浸からず、歩いて湖畔まで行けた。

途中、足がすべって溺れかけたりしたけども…………。

濡れてしまった洋服を脱ぐわけにもいかないし、かといってこのまま乾くのも嫌で…………  
辺りを見渡しても民家らしきものは見当たらず…………  
とりあえず道なき道を進み、湖畔に広がる森へ足を踏み入れた。

案外、なだらかな地形で体力は消費されないけどここまで人の気配がないと怖くなってくる。

「…………こっち来てよかったのかなあ」

「マンマア」

「？」

「マンマア、ナンノオ」

ちょっと離れたところから聞こえる赤ん坊らしき声。

立ち止まって耳を澄ましていると次第に鳴き声に変わってきた。

その声をたどって行くと、たどたどしくも慎重に小さな動くものを

抱っこしている人が見えた。

「泣くなよ、ああ、もうっわっかんねえよ！何がしたいんだよ、何がほしいんだよ！！」

その間も鳴き声は聞こえてきて、近づくともますます大きく鳴き声は響いて耳をさした。

「あのお・・・」

「泣き止んでくれよう・・・」

「あのお・・・、抱き方がよくないんじゃないじゃあ・・・」

「ああ??」

こちらに気が付いた男はズンズンこちらへ近づいてきて、下からすくう様に私を眺め

「聞こえねえんだけど、なに？」

蒼い瞳を座らせてこちらを睨む男は私より若く見える。

「いや、だから・・・ちよつと貸して」

そう言っただけで泣いてる男の腕の中にいる塊をひたたく。赤ちゃんを抱くように腕に包み、トントンと自由になる腕でその塊をやさしく叩く。

すると瞬く間に泣き声は止みスウスウと寝息が聞こえてきた。

「・・・あんだ、すげえなあ」

「二児の母ですから、これくらいなんて事ないですよ。」

「いや、すげえよ。いくらあやしても乳やっても泣き止まなかったのに」

じつくり腕の中の塊を見ると、いささか人間とは言い難い容姿に固まる。

白い肌に閉じられた瞼、が三つ。

おでこである場所にある瞼にはまつ毛はなく、あとの二つは銀色に輝くまつ毛が惜しみなくびっしり生えそろっている。

顔には左右対称な文様が浮かび上がっていて、耳は少し先端がとがっていた。

生え際には小さなうろこが縁取り、まつ毛と同じ銀色の髪の毛が赤ちゃん特有のふわふわした感触で私の肌に触れていた。

でも、すやすや眠るその顔は生まれていくらも経っていない赤ちゃんそのもので……。

見つめていると

「なんで、あんたそんなビショビショなんだ？魚人か？」

「魚人って？……いや人間ですけど。湖に入っただけから濡れちゃっただけで……。」

「あの湖？」

「……あつちの」

手が離せないで目線で示すと、男が少し考えたように遠くを見た。

「へえ、生きて上がってきたやつ初めて見たわおれ……。」

……ん？

であつた??? (後書き)

誰か出てきましたね・・・。

## たつの落とした子

「?・・・・・・はじめて?」

「ん?ああ、あの湖に主がいてさ。気に食わないとやっちゃんだ、ぱっくり」

「ぱっくり?」

「っそ。こんな感じに」

そういうと男はンガアッと大きく口を開けまさしくぱっくりを再現してくれた。

その口には人間のものとは思えない大きな牙が見えて私をビビらせた。

第一、人間の口ってそんなにでかくないし。

よくよく男を観察すると瞳孔は人間のそれとは違って縦に長く、昼間のためか猫のように細く縮められていた。

赤ん坊を抱いてる為に反射的に体を揺らしている私を見て男は不思議そうな顔をする。

「便所なら小屋の脇にあるぞ」

「いや、いらなから」

「じゃあ、なんで体が揺れてる?我慢してんじゃないのか?」

「子供をあやす為に揺れてんのよ。それくらいわかんないの?あんな父親でしょ?」

その言葉に男はあつけにとられた様な顔をする。

しばらく私と顔を見合わせ固まってしまった。

「ぶうううううう」と吹き出し引き笑いを始めた男の声で赤ん坊はもごもご動きだしてしまい、あの響く鳴き声を思い出したらしい男は途端に大きな両手で自分の口をふさいだ。

赤ん坊の動きが治まるのを待ち静かな寝息が聞こえたのを見計らってボソボソと話し始めた。

「おれは、父親なんかじゃねえぞ。」

「ちよつと、あんた言い逃れする気？」

「言い逃れなんかじゃねエって！！実際、種族違うだろ？おれに鱗はない」

種族って言われても・・・とつぶやきながら見たおでこには、目も鱗もなく彼は銀髪ですらなかった。

「・・・まあ、じゃあどうして？」

「あんたが来た湖の所で拾ったんだ。龍は自分で子育てしないから生まれたらその辺に置いていくんだよ」

立派な育児放棄だ・・・、私の世界じゃ犯罪ね。

「産みっぱなしって・・・最低ね。」

「いや、持ちつ持たれつなんだ。龍は世界で、火龍は火を、水龍は水、風龍は風、土龍は土、の秩序を守ってる。すべては龍がいてこ

「そで、その子供を育てることでおれたちは生かされてる」

「神様みたいね……」

「この世界に神はいない。いるのは魔王だけだ」

「魔王？」

「そ、突然現れてこの世界をおさめた。争いばかりだったこの世界に平和をくれたんだ」

「で、あんたはなんでそんなことを教えてくれるの？今の話、この世界の住人なら誰だって知ってることなんでしょ？それを知らない私はおかしいと思わないわけ？」

「んなの、珍しくもなんともない。よく来るぜ、あんたみたいな奴。現に、魔王だって違うところから来たって言われてるしな」

「異世界人に免疫があるってことか……。  
なんだか、出来た世界なこと。  
出来すぎて、逆に怖いわ。」

「やっぱり、私は死んだのかしら。」

「それとも、病院のベッドの上で生死を彷徨ってる？  
それで、夢をみてるのか……。」

「でもなあ、溺れそうになったときも苦しかったし。  
抱いてる赤ちゃんは重みもあるし……。  
試しに、頬を抓ってみると……痛い。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・？大丈夫か？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん、現実をかみしめてただけ」

「で？あんたは龍じゃなかったらなんなのよ？」

「おれ？唐突だな・・・・、おれは・・・・・・口がうまくないから見てくれ」

言っなりイソイソと脱ぎ始める男にあわてて背を向けた。

「なんで脱ぐのよ！！！！」

「だって、服が破けるから。勿体無いだろ・・・・いいぞこつち向いても。」

「何言ってるのよ！あんたの裸なんて見たくないわよ！！」

「大丈夫だって、いいからこつち見ろよ」

「いやだって、変態！」

かたくなに動かない私に「しょうがねえ」とつぶやくとこちらに男が来る。

ベロンと生暖かいものが顔に触れびっくりして目を開けてしまった。

「な、平気だろ？」

そういったのは、四足で立っても私より背丈の大きい蒼い瞳の黒豹だった。

「・・・・・・・・っひ」

腰を抜かしてへたり込むと大きい顔をのぞかせて

「おい、大丈夫か？」

と心配された。

・・・・・・・・普通、気絶してもいいところよね。

「とりあえず、母親ってのはスゲーのな」

ん？男を見ると

「いや、腰抜かしても赤ん坊は落とさないからよ」

だって、落としたら怪我しちゃうじゃない。

何言ってるんのこの人？

「ところであんた、名前はなんだ？」

「あんたも唐突じゃない。人に聞くなら自分から言いなさいよ」

「んあ？クンネ。クンネ・コンル」

「じゃあ、クンネって呼ぶわね。私は ふみ、樋野 史。史って呼んで」

手を差し出すと相手は四足だったことに気が付きあわてて手を引つ

込める。

クンネは「グルルル」と（多分）笑うと耳元を私の耳元に擦り付けた。

よく猫が飼い主にやる親愛の行動だ。

クンネは私と自分の大きさの違いを分かってないと思う。

おかげで赤ん坊を抱えながら押し倒されてしまった。

龍（前書き）

長らく開いてしまいました。  
すみません。

お気に入り登録ありがとうございます。

## 龍

人型に戻ったクンネに赤ちゃんを渡し、重さの無くなった腕を回して肩をほぐす。

スヤスヤと眠る赤ん坊を覗き込みながらクンネは教えてくれた。

「こいつみたいに拾われて育てられた龍は生き物を愛するようになる。温もりを知っているからな。逆に、誰にも見つけてもらえなかった龍は世界を破壊する。」

赤ん坊の頬がピクリと上がる、笑ってるみたいに見えた。

「龍はほっておいても勝手に育つ。ほんとはいったってその辺に転がしておいても問題ないんだよ、十日も経てば一人で餌だつてとるようになる。でもそれじゃこの世界は終わる。見つけたら育ててやらなきゃ、他人の情を教えて生まれてきたことに光を見つけてあげなきゃいけないんだ」

赤ん坊の頭をすっぱり覆えるほどの大きな手で頬をやさしくなでるクンネは、父親ではないがそれでも慈しみのある顔になる。

「じゃあ、拾ってもらえなかった龍は？どうなるの？勝手に大きくなるんじゃない？」

「たいていは闇に転じるな。他人を知らなければ自分勝手に育つだけだ。だから、この世界の奴らは自分の住んでる周辺に常に気を配って暮らしてる。闇に転じた龍ほど手におえないものはないからな」

クンネの中で眠る赤ん坊は自分の運命を知ってか知らずか、安らかな寝顔と寝息をたてていた。

「龍は短期間に大きく育つっていったる？」

「聞いてない、そんな感じの事は聞いた気がするけど」

「……短期間で育つんだ。一人前になるのに一年とかからない」

「一年？」

「龍が子供を産むのはその龍に死期が迫っているからなんだ。自分の次、代わりになる存在を生み落して最後を迎える。まあ、稀に死期を迎えずに生きながらえてる龍もいるんだけどな。つまりは、早く一人前にならなくちゃいけないんだよ龍は」

「……つまり、親は死ぬのがわかってて子供を産むの？」

「そうしなきゃ、この世界は終わるからな。言っただろ？ 龍はこの世界そのものだって」

クンネは赤ん坊をおろしに小屋の中へ入っていく。

その後ろ姿を見ながら史は何か物思いにふけていたのだった。



## 龍（後書き）

ちよつと説明文が多くなっていました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6773t/>

---

専業主婦ですけど、ナニカ？

2011年8月28日11時35分発行